

「種の論理」におけるメタフィジックス

——ドウルーズ哲学から見た田辺の実践哲学——

森村 修

一 はじめに——田辺哲学の「メタフィジックス」

「思想」は、二〇一二年一月号に「田辺元の思想―没後五〇年を迎えて」という特集を組んだ。⁽¹⁾しかし、なぜ今さら「没後五〇年」なのか。それ以前でも、「田辺哲学とは何か」あるいは「種の論理」とは何か」という問いを検討するきっかけはあつたはずだ。あえて「没後五〇年」の特集を組むのは奇異に見える。何らかの作爲を感じるのには、筆者だけだろうか。また、「種の論理」研究については、敬して遠ざけられてきた感もある。ここにも近代日本哲学、特に京都学派研究の怠慢か偏向が見てとれる。しかも「種の論理」研究で最も遅れているのが、科学哲学的アプローチである。

下村寅太郎は、「田邊元全集」第二卷⁽²⁾の解説で、田辺の科学哲学が「我が国に於ける最初の科学哲学であるだけでなく、我

が国の哲学が始めて哲学そのものの根源的動機に到達し、純粹に理論＝哲学を創始した歴史的意義をもつ記念碑的業績である。これは確かに我々の学問史の、否、我々の精神史の事件といふべきである」(T二/664-665)と書いていた。下村の最大限の賛辞にもかかわらず、田辺の科学哲学は正当に評価されなかつた。これも、近代日本哲学研究の怠慢であるといえよう。

というのも、田辺の初期科学哲学は、当時の自然科学者たちから評価されていたからだ。彼の科学史研究は、学問的に信頼のおけるものだった。ところが、晩年の科学の「メタフィジックス(＝形而上学)」については、当時も今も自然科学者は沈黙を守り続けている。下村ですら、田辺の後期哲学を理解しているとはいえない。ただ筆者は、「補助線」としてドウルーズ哲学を用いて、科学のメタフィジックス⁽³⁾、就中「種の論理」

のメタフィジックスを明らかにできると考えている。それは、田辺哲学とドゥルーズ哲学を単に比較することを意味しない。筆者はある仮説を立てており、その仮説に基づいて田辺哲学のメタフィジックスをとり出してみたいのである。その仮説とは、数学者リーマンが「幾何学の基礎をなす仮説について」において「多様体」概念に触れたことによつて、哲学的なインスピレーションを受けた哲学者たちがいたという仮説である。筆者は、この仮説のもとに、「多様体」概念をめぐる異端的系譜³を跡づける作業を行っている。そして筆者は、田辺もこの系譜に属すると考える。

そこで注目したいのは、田辺とドゥルーズが「内包量 (Intensive Größe)」概念に注目し、コーヘンの「微分の哲学」へと遡行し、ライプニッツの「無限小」概念へと導かれている点である。ドゥルーズによれば、ベルクソンにも「多様体」概念が導入されており、「持続」概念に影響を与えていることだ。ドゥルーズも、ベルクソンから「強度」内包量 (Intensive)」概念を摂取し、哲学を構築しているのである。しかも田辺もまた「多様体」概念と「持続」概念を重ね合わせて理解していることに注意しよう。こうして田辺哲学はドゥルーズ哲学と交叉するのだ。確かに、異質な哲学を組み合わせ、接点や交叉点を見いだすことは、筆者の恣意的観点に基づく解釈に過ぎない。しかし、こうした無謀ともいえる解釈によつてこそ、新しい田辺解釈がもたらされると考えている。

本稿では、田辺が「種の論理」をメタ数学的・メタフィジカルに（メタ物理学的に）基礎づけようとしたことを明らかにする。第一に、「種の論理」が連続体という数学的構造を持つことを指摘する。第二に、「種の論理」が力のダイナミズムを背景にしていることを確認し、第三に、「力学の哲学」がライプニッツの「内包量」概念と繋がることを明らかにする。以上から、ライプニッツ・ベルクソン・田辺・ドゥルーズが「多様体」概念をめぐる異端的系譜³に属することを確認する。最後に、「種の論理」が新しい社会存在論の可能性を開示することを付言する。

二 「個」と「種」という「連続体」

田辺は「種の論理」論者と同時期に科学哲学論文を書いている。「数学ト哲学ノ関係」(一九三四)、「思想史的に見たる数学の発達」(一九三六)、「哲学と科学との間」(一九三七)（特に、第五論文「量子論の哲学的意味」(一九三七)、第六論文「古代哲学の質料概念と現代物理学」(一九三五)、「物理学と哲学」(一九三七)等である。これらが重要なのは、田辺の科学的思考のなかに、「種の論理」へと生成する要素が見てとれるからだ。⁵

「思想史的に見たる数学の発達」で田辺は、独自の数学史観に基づいて、「種の論理」にメタフィジカルな基礎づけ⁶を与えている。田辺は、古代ギリシア幾何学を「サブスタンスの

数学」近世数学を「ファンクシヨンの数学」、形式主義数学（集合論）を「メカニズムの数学」と位置づけた。この流れのなかで、数学は一九世紀に「連続体（性）の問題」という危機を迎える。そして、この「連続体（性）の問題」こそ、田辺が数理哲学研究から社会哲学研究へと大きく舵を切るきっかけとなつた。

田辺は、「社会存在の論理」（一九三四）で、数学基礎論の観点から連続体の無限性を取り上げている。「種の論理」と対立する個の論理は、自らを否定する自由を自己の本質とする個体存在の論理である。「個は自己自身のうちに無肯否の対立を統一するものであるから、相対立する反対方向の統一を含み、一方的限定を一次元とすれば少なくとも二次元の統一をなす」（T一六／109）。田辺によれば、個とは種を基体としながら、種を否定し種と対立する。さらに、田辺は、まず種を一次元的連続体として考えた。種と連続する個もまた一次元的である。しかし個は自由を保持しているから、基体としての種や、自らをも否定する自由を持つことになる。それゆえ個は、種から独立するために種を否定し、種と対立することから、種の連続性を断つことができるのである。つまり個は、種に対して否定的であるがゆえに、二次元的な存在と考えられる。こうして個は、肯定／否定、存在／非存在に無という対立を二次元的に統一する存在ということが出来る。しかも個は基体である種を否定し、種から分離対立することによって自立的に種から独立する。し

かし個は、種から離れては存在しえない。なぜなら、種は個の基体だからである。つまり、種と個はそれぞれ一次元的に存在する連続体であるが、種と矛盾・対立を抱えた個が自発的な自由を持つことから、個は基体としての種から独立し、種と対立せざるをえない。それゆえ個とは、矛盾を二次元的に統一する存在といわなければならない。

田辺は、連続体における個の独立について、「今日の直観主義（ブラウワーの直観主義）の数学基礎論において、一次元連続の要素たる実数が我と汝の多次元の統一に相当することくに解せられ（略）、いわゆる極限要素はその属する体系の限定の終末としてはその体系の有すると同じ次元を有しながら、かえつて体系の始源たるはその含む多次元性に由来するようなものである。種に対する個のもつ意味もかかるものでなければならぬ」（T一六／109）と語っている。田辺によれば、個は一次元的連続の要素として存在するのでなく、「我と汝の多次元の統一」である。個が多数集まることによって、連続体としての種が成り立つのではない。個が多次元であることによって、種という連続体も多次元へと高められるのである。個は類・種の要素に過ぎないが、具体的には個体であり、それは存在と非存在との直接統一にほかならない。それゆえ個体は、種が体系の一次元であるのに対して、それ自身で二次元的であるといわれるのである。だからこそ個は、「種の一次元的体系を二次元の契機として新しき立場に高め、それに新たな意味を賦与する」

(*field*) ののである。ここで重要なのは、田辺が、個と種の関係がダイナミズムを持つこと、つまり個の内的な力の対立・競合を視野に入れていることだ。

三 「種の論理」における力学的構造

——「メタフィジカルな」基礎づけ

田辺は種と個の対立に力学的な力関係を持ち込み、「種の論理」を「メタ物理学」の領域へと移しながら基礎づける。田辺によれば、形式主義数学は、それが「メカニズムの数学」に留まっているために、一次元的な連続体として要素の一次元的な系列を形成することから、形式的に把握することはできるが、直観主義のように、〈個が種の肯定も否定も可能である〉という自由選択の可能性を基礎づけることができない。それゆえ、形式主義は、個の二次元性を考えられず、一次元的な個による連続体を捉えることができない。

それゆえ田辺によれば、運動の立場に立つ「メカニズムの数学」では、複雑な力の複合・対立を説明することはできない。だからこそ、「ダイナミズムの数学」が要請されたといつてよい。「ダイナミズムの数学」としての直観主義数学は、「或る一方に行かうとする方向と同時に逆の方向とが張合っている」「連続の本質」を捉えることができる (cf. T一六/136-137)。ここで田辺がいう「ダイナミズム」とは単なる「運動の立場」ではなく、「力の立場」であることに注意しよう。田辺によれば、運動の

立場はものの運動を捉える際に、一方に働く一重 (*single*) の見方を取る。たとえ反対運動が生じても、逆の方向の運動として一重的に捉える。しかし田辺によれば、運動の立場では力を捉えることができない。運動の立場は、運動を記述するのに役立つ量として、ベクトルを考えているに過ぎない。つまり、ベクトルは「大きさと方向とを統一するに止まる」が、ベクトルでは力の複合や現勢化されないままに留まる不可視の力を捉えることはできない。ところが力とは、「順逆といふものが一緒にならなければ考へられない」(T一五/137-138)。「力となると、どうしても順逆といふものが一緒にくつつかなければならない」(*field*)。そして種としての連続体は、「二重の反対の方向の統一」であり、それを捉えるためには「ダイナミズムの力学的統一」が必要になる。種や個を支える力は、互いに対立するための「方向」を持つだけでなく、「量」も持つ。もちろん、方向と大きさを持つベクトルでも、力を考えることはできる。ただ田辺は、ベクトルが一八世紀の「メカニズムの数学」に立つ限り、運動は捉えられても、その背後に働く「力の場」を捉えきることはできないと考えた。

さらに「種の論理と世界図式」(一九三五)以降、田辺は、種としての連続体の根拠づけのために、力学的概念を用いながら「メタフィジカル(メタ物理学的)に」基礎づけていく。「論理の社会存在論的構造」(一九三六)では、田辺は「テンソル量」という概念を使って、種の間に関わる力の交互作用を説明する。

田辺によれば、メタ数学的な立場で直観主義数学を用いて「種の論理」を基礎づけても、種としての社会の内部に齟く様々な「力」を捉えきれない。田辺によれば、社会という種も自由な個も、自らの内部に錯綜した「方向量」を持った「力」を抱え込みながら、自己否定・他者否定を繰り返して、二次元化／二重化された力の複合に基づいて、離合集散を繰り返している。

そして、社会で生ずる、個の力と力の絡み合いによる物理的／身体的 (physical) な現象を、メタフィジカルな「種の論理」を用いて説明することによって、新しい社会存在論を構築することこそ、田辺が試みようとしたことだった。そのために、物理学を超える「メタフィジックス」としての「力学哲学」が必要だった。しかも、「種の論理」に基づく社会存在論は、個や種の力と力の複合、力と力の対立・矛盾や、静止する現象すらも説明する実践哲学でなければならぬ。それゆえ、力が方向を持つだけでなく、力として働く量もまた重要になる。そのために導入された概念が「テンソル量」だった。しかしそれは、田辺にとっては「メタフィジカルな」意味を持つ「物理的量」概念なのである。

田辺によれば、社会に存在する力の働きや静止も、単一的 (einfach) な「運動」概念で捉えきれず、高次方向量としての「テンソル量」が必要になる。例えば「静止」は運動の消滅として理解されるべきでなく、その背後で力の交互作用の均衡が維持され、「力の場」が広がっていると考えなければならぬ。常

に「極微的仮想的なる運動の絶えず間断なく無限に生起せんとしては抑圧せられる激動の直接統一」(T16/316) が存在している。田辺には、メタフィジカルな「力学的概念」を用いて、力の方向量としての「テンソル量」が支配する力の場としての社会という場が見えている。その田辺には、「テンソル量」として「力」の「強度」内包量 (intensity) が生ずる事態をも説明する「力学哲学」が必要だった。

四 「多様体の哲学」の異端的系譜

—— ライプニッツ・コーン・ベルクソン・ドゥルーズ

そもそも田辺に力の「強度」内包量」概念を提供したのは、ライプニッツ哲学だった。ライプニッツの「微分学」は「力の統一」を捉えて」いる。彼の「真の存在」とは「決して延長的に広がっているものではなく、自分自身の力で内から発展するものである (T15/138)。田辺によれば、「内包的」とは全体 (＝種) が先にあるその制限としてのみ部分 (＝個) が考えられる。つまり、ライプニッツは連続 (＝種) の要素としての微分 (＝個) を考えた。田辺の理解を助けるように、下村寅太郎は「ライプニッツ」のなかで「一の内に多を、しかも無限なる多を含むもの、すなわち性質をもてる」として、量的一でなく質的一でなければならぬ。かくのごときものが単に外延的な量に対する内包的 (intensi) な量である。一七世紀においては *intensio* (intensi) とは *inextensum* (inextensi) を意味し、さらに

infinitesimal」と同義に解された。かかる意味での内包量がまさしく「無限小」「微分」と呼ばれたのである」と語っている。それゆえ、「一」の全体としての連続体は、単に要素の集合でなく無限小の積分として解されねばならない (cf. S 7 / 139³)。

さらに、田辺が「微分」という「内包的統一」を得たのは、コーヘンからである。田辺は、コーヘンの〈微分の哲学〉から、ライブニッツの「無限小」概念を経て、「強度Ⅱ内包量」概念に至った。そして田辺は「強度Ⅱ内包量」概念を用いて、連続体(性)の問題やデデキントの「切断」論に向かったのである。ただ田辺はコーヘンの〈微分の哲学〉を批判している。「私の種と呼ぶものはプラトンの質料であつて、自己否定を本質とするテンソルの力学的契機である。その連続性は、単に全体が部分に先だつ内包量として、無限分割の極限たる微分を原理とするに由来するものではない。如何に分割を進めても達することの出来ない極限は、最早延長の可分性を否定せられたものとして外延量の無でありながら却つて延長がそれに就つて成立する所の、延長の創造的根原である、という意味」での「微分の内包量の原理」(T 16 / 344) は田辺には不十分なものである。なぜなら、コーヘンの〈微分の哲学〉は「ベクトルの運動学的」なままに留まっているからだ。しかし、コーヘンの〈微分の哲学〉からライブニッツへと遡源することで明らかになったのは、「種の論理」が「メタフィジカルな」思想の複合の結果であることだ。こうしてライブニッツからコーヘンを経て、ベルクソ

ンや田辺へと至る「多様体」概念をめぐる異端的系譜」を仮定できるのだ。この系譜は、もちろん、あくまで筆者の仮説に過ぎない。ただリーマンの「多様体」概念が、「無限小」概念や「微分」概念と「化学反応」を起こし、「純粹持続」へと至っていることに注意すべきである。そして、これらの哲学を複合的に利用した田辺も、この系譜に位置づけられるのである。

ここであらためて指摘しておきたいのは、「種の論理」の「メタフィジックス」が、ドゥルーズ哲学と近接していることだ。その両者の交叉点に、ベルクソン哲学がある。田辺は「純粹持続」を連続として読み替え、連続がそれを構成している部分へと分割不可能な連続体であることを、「純粹持続」の理論に重ね合わせていた。ベルクソンは「純粹持続」について、「ただ単に質的变化の継起でしかなく、それらの質的变化は互いに融合し、互いに浸透しあつて、明確な輪郭を持たず、自らを外在化させて相互に外的な関係を取り結ぼうとせず、数的存在とはまったく無縁なものなのである。それは、純粹異質性でも呼ぶべきものだ」と述べていた。純粹持続的連続は、部分(個)としての質的に異なる変化が継起しながら、その変化が互いに明確な輪郭を持たず融合し、浸透するひとつの全体を形づくる。それは、外延量としての連続ではなく、内包量としての連続である。

ドゥルーズは、「純粹持続」を「多様体 (multiplicité)」として捉え直し、通常の意味の外延量に基づく多様体と、純粹持続

としての多様体という二つの多様体を区別した。「重要なのは、〔空間と持続の〕混合したものの分解が〔多様体〕の二つのタイプを私たちに示すということである。そのうちのひとつは空間によって（あるいはむしろ、あらゆるニュアンスを考慮に入れるならば、均質的な時間の不純な混同によって）表象される。それは外在性・同時性・並置・秩序・量的差異・程度の差異の多様体であり、すなわち非連続で現勢的な数的多様体である。もうひとつのタイプは純粋な持続として存在する。それは継起・融合・組織化・異質性・質的区別または本性の差異の内的多様体であり、すなわち数に還元不可能な、潜勢的で連続的な多様体である」。確かに連続体は、「多様体（＝集合）」を表すものとしては伝統的な語彙の一部にはなっていない。しかしリーマンの「多様体」概念は、ベルクソンのみならず、田辺に引き継がれ、ドゥルーズにまで到達している。これら哲学者は、自らの立場で、「多様体」概念を用いて自らの哲学を構築している。この「事実」を、私たちは無視するべきではない。いい過ぎを恐れずにいえば、彼らに共通なのは、「多様体」概念を活用しながら、新しい「メタフィジックス」を構築していることなのだ。

五 おわりに

——「種の論理」から新しい社会存在論に向けて
「種の論理」の難しさは、田辺の「メタフィジカルな思考」

に起因する。田辺は、複数の専門領域を横断しながら、説明ぬきに諸概念を複合させていく。プラトンの「質料」を説明するために「テンソル量」という物理学用語を用いなければならなかったし、種と個との対立を説明するために、力が様々に交錯する「力の場」を、プラトン「ティマイオス」篇の「錯動原因」と比較する必要があった（cf. T16/316）。田辺にとつては、古代哲学と現代物理学を両立させ、互いの概念を重ね合わせていく必要があった。なぜなら、「種の論理」は、まったく新しい社会存在論でなければならなかったからである。

私たちは、社会が不可視の力の対立、均衡によって成り立っていることに気づかない。私たちは、社会が物理的力の複合で成り立っていることを自覚しない。それゆえ私たちは、個の存在から、基体としての種、種と種との対立や協働に基づく類を、具体的にかつ原理的に説明する「論理」を構築していないといつてよい。少なくとも田辺には、そのように見えた。だから田辺は時空を超えて交錯する思想を凝集させ、個や種からなる社会を「メタフィジカルに」基礎づける「種の論理」を考えた。田辺にとつて、たとえそれが天皇制に基づく社会存在論であったとしても、国家を含めた社会存在論の構築が焦眉の急であったからだ。悪化していく時代のなかで、田辺が実践哲学を「メタフィジカルに」構築しなければならなかったことを、私たちは想像することすら難しい。しかし私たちは、田辺ほど社会や国家を「メタフィジカルに」思考しえているだろうか。

その反省をもとに、最後にひとつの試みを紹介しておこう。ドゥルーズ哲学から影響を受けたデランダは、「千のプラトー」(一九八〇)などから、「動的編成 (agencement)」概念を引き継ぎ、その英語訳「寄せ集め (assemblage)」概念をもとに新しい社会哲学を構築している。デランダの試みは、ひとつの試論に過ぎない。しかし、徹底的なマテリアリストであるデランダは、人間存在も自然存在も基本的に同じ存在者として扱ひ、個体存在の「寄せ集め」による社会を哲学的に追求している。これこそ、ドゥルーズ哲学を媒介とする、「種の論理」の新しい形といえるだろう。

- (1) 「思想」の対談「田辺元思想」で、杉村靖彦は「歴史的・哲学生史的なアプローチ」に言及している(「対談 田辺元思想」思想二〇二年一月号、一〇五三頁、岩波書店、一〇一一頁)。しかし問題は「京都学派」に対する「歴史的・哲学生史的なアプローチ」ではなく、形而上学的アプローチである。
- (2) 以下、「田邊元全集」からの引用について、括弧内に斜線を挿んで巻数を漢数字で頁数を算用数字で示す。
- (3) 物理学者石原純は、一高時代、田辺と同学年であり、田辺が東北帝国大学理科大学講師の時代に科学の議論をしていた。田辺が書評を書いたことのある桑木或雄も石原も、田辺の科学論を評価している(西尾成子「科学ジャーナリズムの先駆者・評伝石原純」岩波書店、二〇一一年、二二六頁参照)。本稿では、当時の物理学史的背景は割愛してある。
- (4) これまで、筆者は下記の論文を発表している。森村修「田邊元の「多様体の哲学」(1)——「多様体の哲学」の異端的系譜(1)——」(法政大学国際文化学部「異文化」九二〇〇八年)、森村修「多様体と微分

法——田邊元の「多様体の哲学」(2)——「多様体の哲学」の異端的系譜(2)——」(「異文化」一〇、二〇〇九年)、森村修「G・ドゥルーズの「多様体の哲学」(1)——「多様体の哲学」の異端的系譜(3)——」(「異文化」二二、二〇一一年)、森村修「フッサールの「多様体の哲学」(1)——「多様体の哲学」の異端的系譜(4)——」(「異文化」一三、二〇一二年)。

(5) 林はプラウワーの直観主義数学と「種の論理」との関係について詳述している(林晋「数理哲学」としての種の論理——田辺哲学テキスト生成研究の試み(一)——京都大学日本哲学史研究室「日本哲学史研究」第七号、二〇一〇年、五四—六一頁)。

(6) 本稿は「連統(体)の問題」の重要性について触れないので、この点について拙論を参照せよ(森村修「田邊元の「多様体の哲学」(1)——「多様体の哲学」の異端的系譜(1)——」法政大学国際文化学部「異文化」九、二〇〇八年)。

(7) 「連統体(性)の問題」は、デデキントの「切断——論との関係で田辺にとって重要な問題である。田辺は「数理哲学研究」(一九二五)のなかで、「連統体(性)の問題」とデデキントの「切断」論に触れていた。田辺哲学と「切断」概念について、前注の拙論と林論文を参照せよ。林は数学史研究から、田辺哲学と「切断」概念との関係性を指摘している。

(8) 嶺秀樹は、「種の構造」を「テンソル力的場の場」で説明することに否定的である(嶺秀樹「ハイデッカーと日本の哲学——和辻哲郎、九鬼周造、田邊元——ミネルヴァ書房、二〇〇二年、二四九頁)。

(9) 「下村寅太郎著作集・ライブニッツ研究」第七巻、みすず書房、一九八九年。以下、Sと略し、斜線の前に巻数を漢数字であらわし、斜線の後の算用数字で頁を表記する。

(10) 田辺の弟子・田中省三は「コーヘン」(一九四〇)で、「外延量的な連統に対し、内包量的な連統を、量的連統に対し、性質的連統、思维的作用の連関を一次的と考えんとするコーヘンの連統論」が「専ら外延量的に単に対象的、客観的なものとしてでなく、作用的、或

- は若し言い得べくんば主体的なものとして明かにせんとする所に、注目すべき深い思想を含むと云ってよいであらう」(田中省三「コーヘン」弘文堂、一九四〇年、一〇九頁)と云っている。田辺とコーヘンとの関係について、拙論を参照せよ(森村修「多様体と微分法—田邊元の「多様体の哲学」(2)—「多様体の哲学」の異端的系譜(2)」法政大学国際文化学部編「異文化」一〇(二〇〇九年)。
- (11) E. Bergson, *Essai sur le donnes immediates de la conscience*, 1889. (竹内恒夫訳「意識に直接与えられたものの試論」『新訳ヘルクソン全集』第一巻、白水社、二〇一〇年、一〇二頁)。
- (12) ヘルクソンは純粹持続を意識の状態として記述していたのに対して、田辺は「種の論理」の「メタフィジカルな基礎づけ」に用いて⁵⁹。
- (13) G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, pp.30-31.
- (14) Cf. G. Deleuze, *ibid.*, p.31.
- (15) M. Delanda, *A New Philosophy of Society: Assemblage Theory and Social Complexity*, Continuum, 2006.
- (もりむら・おさむ、哲学・倫理学、法政大学教授)